

第2章

石造文化の遺跡

遺跡とは、存在するが破壊されていることなどから廃虚となって目的や機能を果していないものをいい、ピラミッドのように墳墓として建設されたものも含まれる。古代と中世の都市に関するものが多く、ほとんどがユネスコの世界文化遺産（WORLD HERITAGE）として指定され登録されている。ここでは世界の石造文化の遺跡について、アメリカ大陸からアフリカ大陸へ、ヨーロッパを経て中近東に渡り、アジアへと、地球を西から東へ一周するようにして述べる。なお、石造りの遺跡は日本には存在しない。

2・1 ペルー

ペルーは他の中南米諸国と同様にほとんどがスペイン系移民の国であるが、日系人のフジモリが大統領になるなど親日家が多い。

(1) アンデス文明とインカ文明

紀元前3000年頃に、南米のアンデス一帯には、農業や土器を特徴とするアンデス文明（先インカ文明ともいう）が栄えた。13世紀になるとクスコを首都とするインカ帝国が誕生して領土の拡大を図り、数十年で小さなインカ帝国は巨大な帝国となった。それはインカ帝国は領土とした地域へインカ道を建設し、途中にはタンボと称する

宿泊所を設け、チャスキという飛脚を用いて各地の情報を首都のクスコに集めたことによる。これらは2・6節で後述するローマの道とよく似ている。なお、この宿泊所であるタンボは石造で、その遺跡も残されている。そして、15～16世紀にインカ文明が最高に達し、石造技術を中心とした高度の文明が開花した。

大航海時代の16世紀にスペインが中南米を侵略したとき、先住民であるインカ人は鉄砲を知らず、スペイン人の鉄砲を初めて見たという。1532年にフランシス・ピサロを隊長とする180人のスペイン軍が数万人のインカ軍と戦った。そして、フランシス・ピサロはインカ王のアタパルカを騙して捕らえ、インカ人の目の前で死刑にした。王様を殺されて動揺したインカ民族は征服された。インカの太陽神殿の祭壇はスペイン人によって壊されて、その跡には教会が建てられるなど、インカ文明は徹底的に破壊された。

なお、ペルー北部のツンベツ地方のパタカンチャ村に行ってみると、インカの伝統が唯一残っている村で、貴重な存在となっている。

(2) マチュピチュの遺跡

ペルーのリオ・アビセオ国立公園は熱帯雨林の山々で、マチュピチュ、ピンチュード、グラン・パハテンをはじめとして、インカ帝国時代の石造の街の遺跡が多く残されている。

そのなかでもインカ帝国の首都であったクスコに近いマチュピチュの街は、アンデス山脈の海拔約2,500mの高地にあり、大量の石材を山の頂上に運び入れて建設され、太陽神殿などを中心とする街が建設された。インカ文明を代表する空中都市であった。ここへ登るにも大変苦勞するが、石材を運ぶのにはどうしたのであろうか。